

〈論 文〉

テモラウ動詞が条件節述語となる複文の性質
—条件節による受益者の感情表出と性質発揮の機会設定—

呉 丹[†] (東京外国語大学大学院博士後期課程)

The Nature of Compound Sentences with “V-te-morau”
as Conditional Clause Predicate:
The Presentation of the Beneficiary's Emotional Expression
and Disposition through Conditional Clauses

Wu, Dan (Doctoral Course, Tokyo University of Foreign Studies)

キーワード : テモラウ、条件節、複文、機能、比較

Key words : “V-te-morau”, Conditional Clauses, Compound Sentences, Function, Comparison

要旨 : 本稿では、テモラウ動詞が条件節述語となる複文の性質を考察し、先行研究で指摘されている使役動詞が条件節述語となる複文との異同を確認し、前者の独自の性質を明らかにする。事例に基づく分析の結果、主節で述べられる内容は受益者について述べるものと、与益者について述べるもの、それ以外について述べるものがあることと、テモラウ動詞が条件節述語となる複文の条件節は主節で表される受益者の感情表出と性質発揮の機会を設定する機能があることが分かった。

Abstract: This paper discusses the nature of compound sentences with “V-te-morau” as conditional clause predicate comparing these to compound sentences with causative verbs as conditional clause predicate which are analyzed in previous research, and reveals the original characteristics of compound sentences with “V-te-morau” as conditional clause predicate. Analysis based on examples, reveals that events about beneficiaries, events about agents, and other events are described in main clauses, and that the “V-te-morau” conditional clause functions to allow the beneficiary to express emotion and demonstrate disposition.

原稿受理日 (2018-10-01)

査読後掲載決定日 (2019-01-18)

日本研究教育年報. 2019, Vol. 23, pp. 18-35. ISSN 2433-8923



[†] 本稿の著作権は著者が保持し、クリエイティブ・コモンズ表示 4.0 国際ライセンス (CC BY) 下に提供します。 <https://creativecommons.org/licenses/by/4.0/deed.ja>

1. はじめに

テモラウは、「子供が母親に漢字を教えてもらった」のように、単文の述語として用いられることがあるが、「子供が母親に漢字を教えてもらったら、テストの点数が上がった」のように、複文において、従属節の一種である条件節の述語として用いられることもあり、その際には、単文の述語であるときとは異なる機能を果たしていると考えられる。一方、使役動詞が条件形をとって条件節の述語となっている文もある。早津（2016）はこのような構造の文における条件節の性質と文全体の表す意味や機能との関係を考察している。

本稿では、早津を援用し、テモラウ動詞が条件節述語となるとき複文における条件節の意味的機能的性質と複文の意味的性質との関係を考察する。更に、これを早津で明らかにされた使役動詞条件節の複文と比較し、似ている点と異なる点についてもみる。

考察する際に、まずテモラウ動詞が条件節述語となる複文について、与益者（テモラウ文のニ格項）が特定者か、不特定者かということと、それぞれの複文の主節で述べられている内容をみる。その上で、条件節の機能について考える。

例えば次の（1）のような例は、与益者が特定者（この場合は「りん」）の例であり、主節では、「エンゾ」の動作が述べられている。（2）は与益者が不特定者である例であり、主節では、「感情を受け止める」という動作を受けた「人間」の性質が述べられている。

- （1）エンゾはりんに包帯を巻いてもらうと、古い着物の前を合わせて、藁床から立ちあがった。（桃色浄土）
- （2）（人間は）気持ちを聴いてもらい、感情を受け止めてもらえば、冷静さを取り戻すことができる。（癌は、神様からのプレゼントだった）

2. 先行研究

本稿の考察において早津を援用するのは、テモラウ文と使役文の構文的性質に次のような類似性があることによる。すなわち、テモラウ文と使役文は、述語動詞の表す動作を行う人物が主語ではない点で類似している。そして、テモラウ動詞も使役動詞も複文の条件節述語となる構造の文も観察でき、この点においても、両者は構造的に似ている。早津は使役動詞が条件節述語となる複文の諸要素の性質と文の意味との関係を考察する際、使役動作（V-(サ)セル）の主体（ガ格項）が特定者であるか不特定者であるかに注目している。その結果、集められた 201 例のうち、使役主体が特定者である複文が 137 例、使役主体が不特定者である複文が 64 例あることが示され、そのうえで両者の複文の主節に述べられる内容の違いが次の表のようにまとめられている。

表 1 使役動詞が条件節述語である複文の主節で述べられている内容の分布¹

		使役主体が特定者	使役主体が不特定者
ア	使役主体の動作	52	—
イ	使役主体の変化	4	—
ウ B	動作主体の動作	19	6
エ	動作主体の変化	6	—
A	動作主体の性質	—	53
オ C	新たな事態の現出	30	5
カ	事実の判明	12	—
キ	使役主体や話し手の評価	14	—
計		137	64

(早津 2016:386)

早津 (2016) は、この調査で使役主体が不特定者であるものでは、動作主体についての叙述 (上の B と A の例、計 59 例) が 9 割強を占め、とくに動作主体の性質を述べるもの (A) だけで 8 割強を占めているとし、主節に述べられる内容にかなりの偏りがあると指摘している (p.386)。使役主体が不特定者で、主節で動作主体の性質が述べられている例として次のようなものが挙げられている。((3) (4) の下線は早津による)

(3) (彼は) 顔はあんなににきびだらけで汚いけど、歌を唄わせるとほんとに素敵よ。
(痴人の愛)

(4) とても頭のいい子で、一を言うと十まで気がつく子だった。内藤はそうほめたあとで、こう言った。学校にちゃんと行かせたら、きっと伸びるだろうな。(一瞬の夏)
(早津 2016:381-382)

そして早津は、このような主節で動作主体の性質が述べられる複文はほぼ次の 4 つの類にまとめられるとしている (p.387)。I ~IV の「Y」は動作主体を表す。(I ~IV の下線は早津による)

I : [Y ハ V-(サ)セ-条件形 ~ (動作主体についての叙述)]

・光秀は、天下を語らせると誰よりも明晰だ。

II : [V-(サ)セ-条件形 ~ (動作主体についての叙述) Y]

・絵を描かせると天才的な能力を発揮する少年。

III : [V-(サ)セ-条件形 Y ハ ~ (動作主体についての叙述)]

¹ 本稿における表と例文の番号はすべて本稿の筆者による。

- ・ ああいうことをやらせると、あの子は器用なものだ。

IV : [(Yニ／ヲ) V-(サ)セ-条件形 ～ (新たな事態の叙述)]

- ・ 物理学者と小説家を協力させれば、面白いものができるだろう。

(早津 2016 による要約 (pp.387-388))

早津 (2016) はこの I ～ III の構造は動作主体「Y」の性質を叙述するものであり、「佐久間 (1941) で「品定め文」(「物事の性質や状態をいひあらわす」とされる文 [(何々) は (かうかう) だ] (p.155) に近い」とし、「条件節は挿入成分的になっていて、それは「Y」がその性質を発揮したり露呈したりする領域、あるいは「Y」がその性質を発揮できる機会を、いわば設定している」としている (p.388)。

このように、早津は、使役動詞が条件節の述語である複文について使役主体が特定者か不特定者かに注目し、使役動詞条件節述語の複文の性質が使役主体の不特定化によって、つまり文の要素の性質の変容によって、複文全体の性質が変容するということを論じている。

本稿の考察対象はテモラウ動詞であるが、この節の最初に述べたようにテモラウ文と使役文には類似の構文的性質がある。したがって本稿でも、テモラウ文が条件節述語となる複文の性質を解明するにあたり、まず早津に準じた方法によって考察してみることにする。

テモラウ動詞が複文の条件節述語として用いられる文についての研究として、山田 (2004) があるが、山田は、ト、タラ、バ節などの従属節内にベネファクティブ形式 (山田は、テヤル、テクレル、テモラウ、テアゲル、テサシアゲル、テクダサル、テイタダクという 3 系列 7 形式をベネファクティブと呼んでいる。) を含んだ複文における従属節と主節の主語の異同²を考察するものであり、テモラウ動詞が複文の条件節述語として用いられるときの、条件節の性質と文全体の意味との相関については論じられていない。

3. 研究対象と研究方法

3.1 研究対象

本稿では、テモラウの条件形「～テモラウト」(見てもらおうと)、「テモラエバ」(見てもらえば)、「テモラッタラ」(見てもらったら)、「テモラッテモ」(見てもらっても)、「テモラウナラ」(見てもらうなら)、「テモラッタナラ」(見てもらったなら) が条件節述語となる複文を研究対象とする。

本稿に使う用例は、国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス通常版』(以下 BCCWJ とする) と、『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』から収集する。

² 例えば、テヤルがト節に用いられるとき、「仕方がないので P_Q 飯を炊いて、Q_Q 罐詰を開けてやると R_Q よく喰った。(連絡員) (p.301)」の文では、Q の「ø」と R の「ø」は異主語解釈となり、テモラウがバ節に用いられるとき、「P_Q 専門家に診てもらえば、Q_Q すぐに解決の道が得られるさ(寂寞) (p.303)」のような文では、同主語になるという。

BCCWJ を検索アプリケーション中納言で、コアデータと非コアデータの両方に指定し、ジャンルを「文学」に指定し³、短単位で検索する。その結果、388 例が検索された。その中から、「～いい／～いけない」（「見てもらってもいい」、「見てもらったらいけない」）のような慣用的なもの、条件形で終わる文（「見てもらったら？」）のようなものを分析対象から除外したあとの 115 例を本稿の考察対象とした。

以下に、ト節を例に検索形式を示す⁴。

短単位検索

- ・前方共起 1：品詞の大分類が 動詞
- ・前方共起 2：品詞の中分類が 助詞—接続助詞 AND 語彙素が て
- ・キー：語彙素が 貰う
- ・後方共起 1：品詞の中分類が 助詞—接続助詞 AND 語彙素が と

検索対象はいずれも以下の通りに設定する。

- ・検索対象：出版・書籍・文学（コア・非コア）、図書館・書籍・文学（非コア）、特定目的・ベストセラー・文学（非コア）

また、『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』を文字列検索で検索し、上述のような分析対象としないものを除き、51 例収集された。この 2 種のデータを合わせて、166⁵例を本稿の考察対象とした。

3.2 研究方法

第 4 節以降に示す検討に先だってテモラウ動詞が条件節述語となる複文の受益者（「～テ

³ ジャンルを「書籍」の「文学」に指定する理由は、他のレジスター（新聞、雑誌、白書）から収集した用例は、説明的なものが多く、受益者と与益者が特定者か不特定者か判断できないものが多いからである。

⁴ 他の条件節の用例の検索形式は以下のとおりである。

バ節／タラ節／ナラ節：

- ・前方共起 1：品詞の大分類が 動詞
- ・前方共起 2：品詞の中分類が 助詞—接続助詞 AND 語彙素が て
- ・キー：語彙素が 貰う
- ・後方共起 1：品詞の中分類が 助詞—接続助詞 AND 書字形出現形が ば／たら／なら

テモ節：

- ・前方共起 1：品詞の大分類が 動詞
- ・前方共起 2：品詞の中分類が 助詞—接続助詞 AND 語彙素が て
- ・キー：語彙素が 貰う
- ・後方共起 1：品詞の中分類が 助詞—接続助詞 AND 語彙素が て
- ・後方共起 2：品詞の中分類が 助詞—係助詞 AND 語彙素が も

⁵ 外国語の構造の影響を避けるために、翻訳作品を除外した。

モラウ」という動作から利益を受ける人、条件節の主語でもある）が特定者か不特定者かを調査した。その結果、166 例のうち、受益者が不特定者の文は 2 例のみであった。一つは、複文の主節で、ある既定の事実が述べられている文であり、もう一つは、複文の主節で受益者の性質が述べられている文である。以下にその 2 つの文を示す。なお、本稿では、受益者を波線で、与益者を二重下線で、条件節述語を一重下線で、主節に述べられる内容を点線で示すこととする。

(5) 後漢の度量衡制では、一斗は約二リットル弱であり、日本の一升より僅かに多いいどである。だから、米五斗といえば、ほぼ米五升に相当すると考えてよい。病気を治療してもらおうとその謝礼の額がそうきめられていた。だから、人びとはその教団のことを「五斗米道」と呼んだ。(諸葛孔明)

(6=2) (人間は) 気持ちを聴いてもらい、感情を受け止めてもらえば、冷静さを取り戻すことができる。(癌は、神様からのプレゼントだった)

(5) の与益者は文脈から推測できるように「その教団」に属する人であり、特定の人だと考えられるが、受益者は誰であるかを問題としない不特定の人である。また、(6=2) も、前文脈の「人間」から分かるように、受益者が誰だかを問題としない不特定者である。そして、この 2 つの文はいずれも、特定の人物や、時間、場所が指定されておらず、一般的な現象を描く文であり、いわゆる非アクチュアルな事態を述べている。

以上の調査から、テモラウ動詞が条件節述語である複文は、受益者（ガ格項）の特定・不特定の割合が 164 : 2 であるのだが、それに対して、早津 (2016) から分かるように使役動詞が条件節述語である複文では使役主体（ガ格項）の特定・不特定の割合が 137 : 64 であり、両者には大きな違いがあることが分かった。このような違いがあることには、テモラウ文全体の次のような性質が関係していると考えられる。すなわち、テモラウ文は、受益者が与益者の動作によって影響（基本的にはよい影響）を受けることを受益者を主語として述べる文であることが本質である。そういった影響関係を述べる文である以上、その影響を受ける人物が特定のものとして存在していることが多いのだと思われる。このことが、テモラウ動詞が条件節述語である複文の受益者（ガ格項）のほとんどが特定者であることと強く関係するのだと考えられる。一方、使役文は、使役主体の何らかの関与によって被使役者が動作を行うということを述べる文であり、使役主体の特定性は必ずしも必要ないのだと考えられる。

では、テモラウ文を与益者（二格項）が特定者か不特定者かに注目して観察するとどうだろう。テモラウ動詞を条件節述語として用いる複文を見ると、与益者が不特定者である文は 166 例のうち 17 例であり、全用例中では少ないけれども、受益者が不特定の場合に比べ有意な差が見られた。そこで、本稿では、与益者が特定者か不特定者かに注目し、それぞれの複文の主節に述べられる内容の違いを考察し、条件節と複文の関係について見てい

く。本稿ではテモラウ動詞が条件節述語となる複文と使役動詞が条件節述語となる複文を比較するのも一つの目的であるが、早津（2016）は使役主体（ガ格項）が特定者か不特定者かに注目しているのに対し、本稿では、与益者（ニ格項）が特定者か不特定者かに注目し、テモラウ動詞が条件節述語となる複文の独自の性質を考察する。

このような観点から主節で述べられる内容を表にまとめると、次の通りである。

表 2 テモラウ動詞が条件節述語となる複文の主節で述べられている内容⁶

		与益者が特定者	与益者が不特定者
あ a	受益者の感情・評価	43	7
い b	受益者の動作	18	1
う c	受益者の変化	14	2
え d	受益者の性質	11	1
お	与益者の動作	7	-
か	与益者の変化	1	-
き	与益者の性質	1	-
く e	事実の判明	36	6
け	新たな事態の現出	18	-
	計	149	17

4. 与益者が特定者である条件節を含む複文

今回調査した 166 例のうち、与益者が特定者である文は 149 例であった。早津にならって、テモラウ動詞が条件節述語として使われる際に主節に述べられる内容を確認する。その際、複文の主節で述べられている内容が受益者についてのものか、与益者についてのものか、その他についてのものかに分類していく。そして、早津が論じている使役動詞条件節述語を含む複文とどのような異同があるかを探してみる。与益者が特定者である文の 149 例のうち、主節で受益者について述べるもの（あ～え類）は 86 例あり、58%を占めている。与益者について述べるもの（お～き類）は 9 例であり（6%）、一番少なく、その他について述べるもの（く、け類）は 54 例（36%）である。

4.1 受益者について述べるもの

3.2 節の表で示しているように、主節で受益者について述べるもの（あ～え類）が 86 例あるが、この中で、受益者の感情や評価を述べるものが一番多く、43 例ある。主節で受益者について述べるものの半分は受益者の感情や評価について述べるものであることが分かる。その次に多いのは、受益者の動作について述べるもの（86 例中 18 例）と受益者の変化

⁶ 表 2 は早津（2016）（本稿における表 1）にならったものである。

について述べるもの（86 例中 14 例）であり、受益者の性質について述べるものは 86 例中 11 例ある。以下順に見ていく。

（あ）受益者の感情や評価について述べるもの

上述のように、複文の主節で受益者について述べるものの中で、受益者の感情や評価について述べるものが一番多い（86 例のうち 43 例）。このタイプの文では、条件節で受益者が与益者の動作を受けているということが述べられ、主節で受益者の、動作を受けてからの（あるいは、その動作を受けることを想定し、それが実現されたときの）感情や評価が述べられている。主節で述べられている受益者の感情や評価を表すために用いられている表現は、(7) の「うれしい」（ほか「ありがたい」「安心だ」「窮屈だ」など）のような感情や評価を表す形容詞（／形容動詞）や、(8) の「助かる」（ほか「困る」「喜ぶ」など）のような感情を表す動詞、(9) のような感情を述べる文で表されるものが代表される。

(7) 「奥さんの料理は絶品ですからね」「いや、それをいってもらうとうれしいですな。

わが家は夫婦船ですけんね。さあ、飲んで、飲んで」(食後は眠い)

(8) 「ええ。確かに、そうでした。家内のバッグの中から現金と一緒に、何となくあの手帳を抜き取ったのはわたしです」「よかった。そう、素直に話してもらうと、非常に助かるんですがね」(見えない宝石)

(9) 「分った、分った。このまま海のほうに直進だね、船長」せっかく船長と呼んでもらっても、期待していたほどの気分にはなれない。からかわれたような気さえた。

(方舟さくら丸)

(7) - (9) の主節で述べられているのは、プラスの意味（「うれしい」など）にせよ、マイナスの意味（「困る」など）にせよ、いずれも受益者の感情であり、そしてこのような感情には、受益者による与益者の動作に対しての評価が含まれている。

このような、複文の主節で与益者の動作への評価が含まれた受益者の感情を述べる文は、主節で受益者について述べるものの中で一番多く、また、テモラウ動詞が条件節述語である複文の全体の中でも多いことがわかる。この傾向はテモラウ文の有する恩恵享受性という意味特徴に関連すると考えられる。つまり、複文の条件節でテモラウ文が用いられ、与益者の動作からいい影響（恩恵）或いは悪い影響を受け、そうすることによって、自然に主節で受益者が与益者の動作の影響を受けた後の結果、つまり受益者の与益者の動作への感情・評価が述べられる。

一方、早津（2016）の調査から分かるように、使役動詞条件節の複文の主節で述べられる内容のうち一番多いのは、使役主体の動作についてのものであり、使役主体の感情について述べるものがない。この点では、使役動詞条件節の複文とテモラウ動詞条件節の複文の主節に異なる性質が現れているが、使役主体の感情についてのもがない理由は、条件節で使役主体の被使役主体に対しての使役動作は表されているが、被使役主体の動作から影響を受けていることは述べられていないからである。したがって、被使役主体の動作か

ら影響を受けることはなくその動作についての評価を窺えないのは当然のことだと考えられる。

(い) 受益者の動作について述べるもの

テモラウ動詞条件節で働きかけの動作が述べられ、主節で受益者の動作が述べられる文は 18 例ある。

(10=1) エンゾはりんに包帯を巻いてもらおうと、古い着物の前を合わせて、藁床から立ちあがった。(桃色浄土)

(11) ホテルの前で、本坊夫人に車から落してもらおうと親子三人は、むっつりして、エレベーターを待った。(太郎物語)

このような主節で受益者の動作について述べるもののすべてが、(10=1) (11) のような、条件節がト節で、条件節と主節の動作が継起的なものの文である。

早津 (2016) は、使役動詞条件節の複文では、主節で動作主体の動作が述べられる際に、その多くは、条件節はト節で、そして 2 つの動作が継起的なものであると指摘しているが (p.376)、本稿で調査したテモラウ動詞条件節の複文はこの点において使役文と似ている特徴が見られた。

(う) 受益者の変化について述べるもの

主節に受益者の変化について述べられるものは 14 例ある。これらは、(12) のようなまわりの状況の変化を表すものや (13) のような身体状態の変化を表すものがある。

(12) 本来なら傘張り内職でもしてもらえば、少しは生活の足しになっただろう。しかし、浪人とはいえ武士である夫に内職などさせてはならない。(若妻めぐり)

(13) 「明日には医者どんに診てもらえるすけ、もう安心だのんし」「医者なんず、金の無駄だ」母の返事に、妙はうろたえた。「なにいうんだ。医者どんに診てもらったら、よくなるに決まってるろがね」(山妣)

(え) 受益者の性質について述べるもの

このタイプの文は、条件節で与益者から動作を受けるということが述べられ、主節で受益者の能力の有無という性質について述べられている。このような文は 11 例ある。これらの主節の述語は (14) のような動詞の可能形のものや (15) のような理解能力という性質を表す述語「分かる」のものがある。

(14) 「じゃあ、俺、行くよ。迎えに行く。すぐに迎えに行くから—」『でも一ボク一迎えに来てもらっても一スグルと二緒に帰れない—』(僕らのロビン・フッド宣言)

(15) 一度ではよく分らなかったが、エセルに二度目をゆっくり読んでもらうと意味が分った。これはかなり有望だと内心思った。(若き数学者のアメリカ)

早津（2016）で分かるように、使役動詞を述語とする条件節を含む複文には、使役主体が特定者であるときに、主節で使役主体の性質について述べる例がないようだが、テモラウ動詞条件節を含む複文には、使役主体と構文的に同じ位置にある受益者が特定者（この場合は与益者も特定者である）であるときに、主節で受益者の性質について述べる文が観察される（86 例のうち 11 例）。これはテモラウ動詞条件節を含む複文と使役動詞条件節を含む複文との大きく異なるところである。このような違いがある理由は、次のようなことが考えられる。つまり、テモラウ文の重要な性質は受益者が与益者の動作から影響や恩恵を受けることである。そのような性質があるため、複文構造のテモラウ文において、条件節で述べられている与益者の動作から影響や恩恵を受けることを表し、主節で受益者の性質つまり能力の発揮や能力のなさについて述べるのが可能になる。それに対して、複文構造の使役文では、条件節で使役主体から動作主体への働きかけについて述べられているが、その動作から使役主体が影響や恩恵を受けることについては述べられていない。その影響や恩恵がないため、主節では恩恵を受けてからの使役主体の性質についての叙述がないのだと考えられる。

次節から主節で与益者について述べるものを見ていく。

4.2 与益者について述べるもの

テモラウ動詞条件節の複文において、主節で与益者について述べるものは 9 例であり、受益者について述べるものの 86 例に比べると、かなり少なくなっている。主節で与益者について述べるものの中には、与益者の動作について述べるものがもっとも多く、9 例中 7 例あり、与益者の変化について述べるものと与益者の性質について述べるものはそれぞれ 1 例のみである。

（お）与益者の動作について述べるもの

この類の複文は、条件節では受益者から与益者への動作実行の働きかけが述べられ、主節では与益者がその働きかけを受けてからの動作が述べられている。これらの用例はいずれも条件節と主節の動作が継起的なものである。そして、与益者の動作はいずれも受益者に対してなされる動作である。これはテモラウ文の恩恵性という性質とつながっていると考えられる。つまり、受益者が与益者に働きかけをしていると同時に、与益者の動作から影響や恩恵を受けてもいる。主節で与益者から受益者に対してなされる動作が述べられているのは与益者の影響や恩恵の具体的な内容を表すためだと考えられる。

- (16) 俊ちゃんは不景気だってこぼしている。でも扇風器の台に腰を掛けて、憂鬱そうに身の上話をしていたが、正直な人と思った。浅草の大きなカフェーに居て、友達にいじめられて出て来たんだけど、浅草の占師に見てもらったら、神田の小川町あたりがいいって云ったので来たのだと云っていた。（放浪記）

- (17) 産月が迫った妻は、しばしば腹の鈍痛を訴えた。医者に診てもらおうと、早産のおそれがあるといって、黄体ホルモンを注射してくれた。(忍ぶ川)

(か) 与益者の変化について述べるもの

与益者の変化について述べるものは次の1例のみである。主節では与益者の「人」の「左枝子に神経質になる」という変化が述べられている。

- (18) 人々が私のそれを話し合って笑っているような気のする事はよくあった。然しそれは私にとって別に悪くはなかった。私達が左枝子の健康に絶えず神経質である事を知って貰えば、人も自然、左枝子には神経質になってくれそうに思えたからだ。(小僧の神様・城の崎にて)

(き) 与益者の性質について述べるもの

複文の主節で与益者の性質について述べるものも1例のみである。

- (19) 作品にとって他人に伝えるための、共通イメージがいかに大切であるか、ということです。このことを知らずして書かれた作品があるとします。この作品を添削してそれらしく直させ、清書してもらっても、その人は次作もまた前作と同じようなレベルのものしか書けません。(プロの書き技)

(19)の受益者は明示されていないが、文脈から推測できるように、話し手であることが分かる。この文は、条件節で与益者の動作を受けるとことが述べられ、この条件節で述べられた動作が実現されると、主節で述べられる事態が現れるということが表されている。与益者の能力のなさという性質についての叙述である。

4.3 受益者と与益者以外について述べるもの

早津(2016)は、使役動詞条件節の複文において主節が使役主体や動作主体についての叙述でないものとして、「新たな事態の現出」と「事実の判明」、「条件節で述べられている事態についての使役主体や話し手の評価」があるとしている。本稿の考察では、テモラウ動詞条件節を含む複文に「新たな事態の現出」と「事実の判明」に近い文が観察された。この節で、そのような文について見ていく。

(く) 判明した事実について述べるもの

この類の複文の主節で述べられている内容は、直接に受益者と与益者についての叙述ではなく、それまでに存在していた事態が、条件節の事態が実現することによって、判明したということである。このようなものは主節で受益者と与益者以外について述べるもの(54例)の中で一番多く、36例ある。

- (20) その頃、彼女には隆という年下のボーイフレンドがいて、かなり気に入っている様子だった。グループでスキーに行った時の写真を見せてもらったら、いかにも小夜子のタイプといった感じで、線は弱いけど清潔そうな好青年だった。(わたしから好きになる)
- (21) 一番親切そうな秘書のエセル嬢に、帰りにおみやげを買って帰るからと約束してから、私あての郵便物の点検を頼んだ。関係のありそうな封書がコロラド大学から届いていた。封を開いて読んでもらうと、それは数学教室副主任のバートン・ジョーンズ教授からのもので次のように書かれてあった。(若き数学者のアメリカ)

(け) 新たな事態について述べるもの

これらの複文の主節で述べられている内容は、(く) 類のようにそれまでにあった事実が判断したことについてではなく、受益者或いは与益者と関連のある新たに出現した事態についての叙述である。条件節で述べられている動作が実現すると、その結果として、主節に述べられる新たな事態が現れるということが表わされている。このような文は18例ある。

- (22) 『いや張良は今に閑居して、道を修め粗食に甘んじ、殆ど朝には出仕しないので、今更妾の為に考えてはくれないでしょう』『臣は張良の子張辟強と常に親しく交際をしていますので、この人に話をし父に言って貰えば、張良は必ず黙っている事できず相談に乗って呉れると思います』(四面楚歌)
- (23) (清子は) 知り合いの窯で焼いてもらうと、素朴だが、なんともいえない味のある皿が焼きあがった。(ファイナル・ゼロ)

以上4節を用いて与益者が特定者であるときにテモラウ動詞条件節を含む複文の主節に述べられる内容を確認した。すでに述べたように、テモラウ動詞条件節を含む複文の主節で述べられる内容で最も多いのは、受益者の感情についてのものであるが、早津(2016)で指摘されている使役動詞条件節の複文の主節の内容で最も多いのは、使役主体の動作についてのものである。このようにテモラウ動詞条件節の複文と使役動詞条件節の複文に異なる特徴が現れ、テモラウ動詞条件節の複文の独自の性質がうかがえる。つまり、4.1節でも簡単に述べたが、テモラウ文は受益者が与益者への動作要求の働きかけも表しうる一方、与益者の動作から影響(いい影響或いは悪い影響)を受けることも同時に表す。したがって、与益者の動作の影響を受けたことを何らかの形で表出することが可能となり、上記のように主節で与益者の動作に対する受益者の感情を述べるものが一番多くなってくる。それに対して、使役文の場合は、使役主体から被使役者への動作要求の働きかけは表されるが、被使役者の動作からの影響については表されないため、その影響を受けたことの裏付けとしての感情が述べられていないということも理解できよう。そして、使役文の性質は、使役主体から動作を実現させるように被使役者に働きかけるということであるため、早津で指摘されているように、使役動詞条件節の複文の主節の内容で最も多いのは、使役主体

の動作についてのものである。そして、条件節で使役主体から被使役者への使役動作が述べられ、主節で継起的に生じる使役主体の動作を述べるという文が見られる。

次の 5 節で与益者が不特定者であるときにテモラウ動詞条件節の複文の主節で述べられる内容について見ていく。

5. 与益者が不特定者であるテモラウ動詞条件節を含む複文

与益者が不特定者である複文は複文の全体の中で数が少ない（166 例のうち 17 例）が、ある程度の偏りが見られる。このような複文は、主節で受益者について述べるものももっとも多く、17 例のうち 11 例であり、65%を占めている。そしてこれらの受益者について述べるものは、4 節で見た与益者が特定者である複文の場合と同じく、受益者の感情や評価について述べるものが最も多い。与益者について述べるものは今回考察した用例にはなかった。また、受益者と与益者以外のものについて述べるものとして、事実の判明について述べるものが 6 例ある。

5.1 受益者について述べるもの

与益者が不特定者であるときに、複文で受益者について述べるものは、受益者の感情や評価について述べるもの（7 例）と、受益者の動作について述べるもの（1 例）、受益者の変化について述べるもの（2 例）、受益者の性質について述べるもの（1 例）がある。これらのものは 4 節の（あ）類—（え）類と主節で述べる内容という面で似ており、与益者が特定者か不特定者かという面で異なる。以下に例を挙げながら見ていく。

（a）受益者の感情について述べるもの

この類は、複文の条件節では受益者が与益者の動作から影響を受け、主節では与益者の動作に対しての感情が述べられ、そして、同時に、その動作に対する評価もうかがえる。このような文は 7 例ある。

（24）言ってみれば、歌舞伎座の三階席からの、間の悪い掛け声みたいなものだ。顔も見えない遠くから、ぼんやりした声をかけてもらっても、こつちとしては有り難さ半分、迷惑半分、近ごろでは却って気持ちが萎えていく。（女神）

（25）（ムロイ：）絶対言わなそうな男に「愛してる」って言わせんのがいいんじゃない。しょっちゅうそういうこと言うやつに言ってもらってもうれしくないもん。（プチ美人の悲劇）

（b）受益者の動作について述べるもの

主節で受益者の動作について述べるものは 1 例のみである。

（26）わいかてここを助けてもらったら、広前建立の寄附金位、ポンと出しまんがな。（熊楠の家・根岸庵律女）

(c) 受益者の変化について述べるもの

主節で受益者の変化について述べるものは 2 例ある。

(27) (私は) せめてその揺らぎや葛藤を誰かに聴いてもらえば、もう少しは落ち着き、平常心に戻っていたに違いない。(癌は、神様からのプレゼントだった)

(28) より子もほんのすこしの期間入院して、お腹の水を抜いてもらえばすぐに元気になるだろう。(より子。天使の歌声)

(d) 受益者の性質について述べるもの

受益者の能力の発揮に関する性質を述べる文も 1 例のみである。

(29=2) (人間は) 気持ちを聴いてもらい、感情を受け止めてもらえば、冷静さを取り戻すことができる。(癌は、神様からのプレゼントだった)

5.2 受益者以外について述べるもの

受益者以外について述べるものは、次の e 類のようなそれまでにあった事実が判明したことについて述べるものの 6 例である。

(e 類) 判明した事実について述べるもの

(30=5) 後漢の度量衡制では、一斗は約二リットル弱であり、日本の一升より僅かに多
いていどである。だから、米五斗といえ、ほぼ米五升に相当すると考えてよい。
病気を治療してもらうとその謝礼の額がそうきめられていた。だから、人びとは
その教団のことを「五斗米道」と呼んだ。(諸葛孔明)

(31) こんにちは。とかこんなところと言うのも間が抜けて変な感じですが、どうも三
雲です。あとがきです。早速ですがこの作品、血迷ったタイトルを見てもらえば
わかるとおり、私のほかの作品（特に本作に先行して発売された『i.d.』シリーズ
など…）とは、いろいろ違ってます。(道士さまといっしょ)

以上 4 節と 5 節を用いて、テモラウ動詞が条件節述語として用いられるとき、複文の主節で述べられる内容を与益者が特定者か不特定者かに注目して見てきた。

表 2 から分かるように、与益者が特定者である複文は 166 例のうち 149 であり、与益者が不特定者である複文より圧倒的に多い。そして、与益者が特定者である複文の主節で述べられる内容は、受益者について述べられるものが多く (149 例のうち 86 例、58%)、その中でも受益者の感情・評価について述べるものが最も多い (86 例のうち 43 例、50%)。一方、与益者が不特定者である複文は数が少ないが、全体の 17 例のうち 11 例が受益者についての叙述のものであり (65%)、こちらも受益者の感情・評価についての叙述のものが最も多い (11 例のうち 7 例、64%)。以上の数値から、与益者が特定者であれ不特定者であれ、主節で受益者について述べるものがそれぞれ 58%と 65%であるように両者にあまり違い

がないということが分かる。そして、与益者が特定者であれ不特定者であれ、主節で受益者について述べられる場合、それは感情・評価であるものが半数以上（それぞれ 50%、64%）だという点でも似ている。

また、与益者が特定者であるものと不特定者であるものの割合は 149 : 17 であり、このような差が生じるということは、与益者が特定者であるほうが、その動作からの影響を受益者に及ぼすということを述べやすいからではないかと考えられる。さらに、与益者が不特定者である 17 例の主節の内容の半分以上が受益者について述べるものであり、与益者について述べるものが一つもないということも、不特定のものについて何か述べるのは難しいからだと考えられる。

更に、この調査結果を早津（2016）で指摘されていることと比べると、テモラウ動詞条件節の複文と使役動詞条件節の複文とに次のような異同がある。

まず、2 種の複文には、いずれも全体としては主節に受益者／使役主体の動作と変化、与益者／被使役者の動作、変化と性質、新たに現出した事態や、判明した事実が述べられるものが見られる。一方、2 種の複文の大きな違いは、テモラウ動詞条件節の受益者と使役動詞条件節の使役主体とが同じく主語の位置にあるが、それぞれの主節で述べられている内容を見ると、受益者の感情について述べる用例は多数あるのに対して、使役主体の感情について述べるものは 1 つもないということである。使役動詞条件節の複文の主節に述べられる内容の多くは使役主体の動作についてのものであるが、これは、すでに述べたように使役文には被使役者に働きかけをし、被使役者がそれを受けて動作を実現するというものが少なくないことと関連する。それに対し、テモラウ文の基本は与益者に働きかけをして動作を実現させるということだけでなく、むしろ働きかけの有無にかかわらず与益者の動作から影響を受けることであるという点に関係する。従って、主節で受益者が与益者の動作を受けてからの影響つまり受益者の感情や評価などについて述べるものが多いのだと考えられる。

5 節で示しているように、テモラウ動詞条件節の複文の与益者が不特定者であるとき、その主節で述べられている内容は受益者についての叙述のものがほとんどであり、与益者について述べるものはなかった。その理由は、与益者が不特定者であるため、主節で与益者について何を述べるかははっきりしないことが考えられる。これは、早津で指摘されている「使役主体が不特定者である複文において使役主体についての叙述がないのは、不特定である使役主体について何か述べるということが考えにくいことから当然ともいえる」（pp.386-387）ということに一致している。

次の 6 節ではテモラウ動詞条件節述語の複文における条件節と主節との関係について見ていく。

6. 条件節による受益者の感情表出と性質発揮の機会設定

2 節の先行研究でも示したように、使役動詞条件節述語の複文の性質が使役主体の不特定

化によって、文全体の性質が変容するという特徴があるが、テモラウ動詞が条件節の述語となる複文は、使役文の場合の使役主体と構文的に同じ位置にある受益者のほぼすべてが特定者である（166 例のうち 164 例）ため、使役文の場合のような、文の要素の性質の変容によって文全体の性質が変容するという特徴がないことが分かった。一方で、テモラウ動詞条件節の複文には独自の性質がうかがえる。複文の構造をみると、以下のようないくつかのタイプにまとめることができる。

① V-テモラ-条件形 ～（受益者の感情・評価についての叙述）

受益者は文中に現れるか文脈から推測される。

例：そういつてもらうと、ぼくも気持が安らぐよ

そうして鬼の軀を冥府の獄卒どもに引き渡して後始末してもらえば事足りる

② V-テモラ-条件形 ～（受益者の能力という性質についての叙述）

受益者は文中に現れるか文脈から推測される。

例：その印税を送ってもらえば、何カ月かは暮していける

エセルに二度目をゆっくり読んでもらおうと意味が分った

上記の①-②の構造をとる複文は、条件節で主節に述べられる受益者の感情を表出する機会と、能力などの性質を発揮する機会を設定している。

早津（2016）は、（第 2 節に掲出した）I-IVの構造は「（何々）は（かうかう）だ」という品定め文に近いとし、「条件節は挿入成分的になっていて、それは「Y」がその性質を発揮したり露呈したりする領域、あるいは「Y」がその性質を発揮できる機会を、いわば設定している」としている（p.388）。早津は使役文の使役主体（ガ格項）に注目し考察しており、本稿では、テモラウ文の与益者（ニ格項）に注目し調査しているように、早津（2016）と着目点が異なるが、本稿でもテモラウ動詞の条件節に機会の設定の機能があることが分かった。ただし早津の考察によると、使役動詞条件節に、「ある人は、恋の歌を歌わせるととっても素敵よ」（早津 2016:388）のような「領域の設定」（被使役者の「性質を発揮したり露呈したりする領域」（p.388）という機能もあるが、本稿で考察したテモラウ動詞条件節はこれにあたるものではなく、すべてが機会の設定である。

この機会の設定と領域の設定というのは、高橋（1983）の考えであり、高橋は動詞の中止形から発達したもの（「（～に）おいて」、「（～と）して」など）とともに、動詞の条件形から発達したもの（「（～と）きたら」、「（～から）いうと」など）も後置詞としてみとめ、条件形から発達した後置詞を「話題をさそいだすもの」（「君江さんときたらじつにのんきだからな。永井荷風「つゆのあとさき」」（p.312）と「観点をひきだすもの」のように分けている。更に、「観点をひきだすもの」の下位分類として「側面のぬきだし」（「性質からいうと、K は私より無口な男でした。（こころ）」（p.315））というのがあるとされている。この類のものは主節で条件節に示されている側面の性質について述べられている。早津（2016）における「領域の設定」という機能はこの「側面のぬきだし」に近いとされている。

るが、「機会の設定」にあたるものは高橋（1983）の分類にはないという。

なお、本稿では「～いい／いけない」（「見てもらってもいい」、「見てもらったらいけない」）のような慣用的なものを除いたが、このような慣用的なものも受益者の感情や評価について述べるものであり、この点で上記の①のタイプの主節が受益者の感情・評価についての叙述である文とつながっている。

以上見てきたように、テモラウ動詞条件節述語の複文を、受益者（ガ格項）が特定者か不特定者かで分類すると、受益者が特定者のものが圧倒的に多く、使役文の場合のように、使役主体の不特定化によって文全体の性質が変容するというような特徴がないことを確認できた。しかし、テモラウ文の与益者（ニ格項）に注目し分類すると、与益者が特定者であるものと不特定者であるものの割合は 149:17 であるように、有意な差が見られた。ここにテモラウ文の独自の性質が伺える。つまり主節で受益者の感情表出と性質が述べられ、それらを発揮する機会が条件節で設定されるという機能がある。

なお、周知のとおりテモラウ文は使役文と似た用い方をされる一方、受身文とも似た用い方をされる。受身形述語条件節の複文も観察される。BCCWJ からランダムに 100 の用例を収集し分析してみると、受身形動詞が条件節述語となる複文の主節では、(32) - (35) のように、被動者（ガ格項）の感情、動作、変化、性質について述べるものもあることが分かる。このような構文の分析は別稿に譲り、ここでは例をあげるにとどめる。

- (32) そんなこと褒められてもちっとも嬉しくなかったが、ぼくはへへへとだらしなく
笑いを漏らしながら…（本家スバラ式世界）
- (33) 脱走をするにはどうしたらいいのか、その具体的な手段を、明けても暮れても考
えていました。運動時間に外に出されると、あれやこれやの観察をしました。（死
刑囚からの恋うた）
- (34) どうやらそのニンフたちに人間が誘惑されると、狂喜の状態になってしまうので、
（男と女の探偵小説）
- (35) 佐恵にからかわれても、文句は言えない。（花ある季節）

7. おわりに

本稿では、早津（2016）を援用し、テモラウ動詞が条件節述語となるとき、テモラウ動詞条件節の性質と複文の性質を考察した。まず使役文の場合と同じようにガ格である受益者に注目し複文を分類すると、そのほとんどは受益者が特定者のものであるということが分かった。これはテモラウ文が述語動詞の表す動作から影響を受けることを含意することと関係する。つまり、その影響を受ける人物が特定の人として存在するほうが、人の動作から影響を受けるという意味が表されやすいからだと考えられる。そして、使役文の場合は、使役主体の不特定化によって、文全体の性質が変容するという性質があるが、テモラウ文の場合はそのような性質がないことを確認した。

一方、テモラウ文の与益者に注目し複文を分類してみると、与益者が不特定者であるものは全用例中では少ないが、有意な差が見られた。与益者が特定者か不特定者かに注目し複文の主節で述べられる内容を見ると、与益者が特定者であるときに、主節で受益者の感情や動作、変化、性質と、与益者の動作や変化、性質、及び判明した事実や新たに現出した事態が述べられていることが分かる。また、与益者が不特定者であるときに、主節では受益者の感情や判明した事実などは述べられているが、与益者については述べられていない。更に、テモラウ動詞述語条件節の複文は、条件節で受益者の感情表出や能力発揮の機会を設定する性質があることが分かった。

本稿の考察を通して以上のようなことが分かったが、分析対象にできた複文の数が十分でなかったかもしれない。今後用例数を増やして更に考察する必要がある。

参考文献

- 国立国語研究所（宮島達夫）（1972）『動詞の意味・用法の記述的研究』（国立国語研究所報告 43） 秀英出版
- 佐久間鼎（1941）『日本語の特質』 育英書院
- 高橋太郎（1983）「動詞の条件形の後置詞化」 渡辺実（編）『副用語の研究』 明治書院（高橋太郎（1994）『動詞の研究—動詞の動詞らしさの発展と消失』 pp.102-120, むぎ書房, に再録）
- 仁田義雄（1995）「シテ接続をめぐって」 仁田義雄（編）『複文の研究（上）』 pp.87-126, くろしお出版
- 早津恵美子（2008）「人名詞と動詞とのくみあわせ（試論）—連語のタイプとその体系」『語学研究所論集』 13, pp.43-76, 東京外国語大学語学研究所
- 早津恵美子（2016）「第 13 章 使役動詞条件形の後置詞への近づき 使役主体の不特定性と使役文の性質」『現代日本語の使役文』 pp.371-394, ひつじ書房
- 山田敏弘（2004）『日本語のベネファクティブ—「てやる」「てくれる」「てもらう」の文法—』 明治書院

調査資料

- 国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス』
『CD-ROM 版新潮文庫の 100 冊』